聖書ヘブライ語 qatal 形の時制解釈：現代フランス語の複合過去と単純過去を手掛かりに

池田　晶*

Tense Interpretations of Qatal Forms in Biblical Hebrew: in the Light of Passé Composé and Passé Simple in Modern French

Akira IKEDA

Abstract: Tense interpretations of qatal forms in narratives and dialogues in Biblical Hebrew are different. The tense of qatal forms is interpreted in many ways. A basic tense of action verbs is preterite in narratives, but in dialogues, on the other hand, a basic tense seems to be present when we interpret qatal forms in the light of English verb system by taking a character's state of mind into consideration. In order to understand tense of a qatal forms better, in this paper, French translations are refered to by comparing two French "past" forms, passé composé and passé simple. Verb systems are different from languages to languages, so if we compare so-called "past tenses" in English and French, they are different from each other and as a result, the translations and tense interpretations can be different.

Key words : Biblical Hebrew, French, English, tense

1. 聖書ヘブライ語動詞 qatal 形の時制解釈

聖書ヘブライ語の動詞の一形態である qatal 形は伝統的には完了形とされていたが、最近のセム語学の成果から池田潤（2004）で以下のことが提示された[1]。

- qatal 形は TMA（Tense, Mood, Aspect）に関して無標である
- qatal 形の TMA は文脈（前の文の TMA と構文、同一文中の副詞）によって決まる
- 文脈からとくに指定がない場合、qatal 形の動詞の意味に応じてデフォルト値をとる（動作動詞は過去、状態動詞は現在ないし習慣）

以上の成果は、物語の地の文の分析結果から得られたもので、以来、本論筆者はこの結果をもとに会話文の分析を行ってきたが、地の文と同様の分析結果が見られる一方、異なる部分も多くみられ、池田晶（2018）では以下の結果が得られた[2]。

- 地の文と同じく TMA に関して無標な qatal 形も見られる
- 会話文における聖書ヘブライ語の qatal 形の TMA 解釈には人称と関連するので、同一文中であっても人称の交替と共に TMA の解釈も変化する
- 動作動詞のデフォルト値は過去よりも現在完了が多い

分析対象とした会話文の qatal 形の動作動詞のテンス理解について、英訳聖書を参照すると、ほぼすべての英訳聖書では過去ではなく、現在完了で解釈しており、結果的にデフォルトが過去ではなく非過去（現在完了）であった。つまり、時制を解釈するにあたり、「英語では」地の文の分析結果がそのまま当てはまらず、テンス理解が大きく異なっていた。該当箇所について、文法的には過去形を用いることも可能であるが、その個所がほぼすべて現在完了となっているということは、何を意味するか。文脈からの指定のない動作動詞の qatal 形は、それが地の文に出現していたとしたらデフォルト値の過去形と取られるであろうが、会話文ではデフォルトの過去形ではなく、現在完了として翻訳されていることに一つのヒントがあるのではないか。また会話文の分析のために地の文の既存の研究成果を「機械的にあてはめること」自体が適切なのだろうか。特に、会話の場合は登場人物の心情が強く影響を与えるはずであるが、動詞の形態が 1 つしかないがゆえに時制解釈するにあたり過去・非過去の選択肢がある場合、語彙アスペクト、動作様態のみに注目して心的態度を

（2023 年 1 月 23 日受理）
*宇部工業高等専門学校　一般科

考慮に入れないのは適切なのであろうか。また、テキストを受け取った読み手がどのように判断をするのか。このような問題意識を持って qatal 形の時制解釈の可能性を探るべく、英語だけでなく現代フランス語の時制解釈も参考にしてみたい。

2. qatal 形の英訳

英語の場合、現在完了は過去の出来事が現在にまで影響を及ぼしており、過去と現在が結ばれている。英語で「～が亡くなった」という文を過去形で表す場合と、現在完了で表す場合とでは、前者では、過ぎ去った過去の出来事とされている一方、後者の現在完了は過去において亡くなったこと自体が現在にまで影響を及ぼし、ある種の悲しみや寂しさという発言者の「心情」を含んだ表現になるという。会話文においては英訳聖書では現在完了が多く用いられていることから、テンス理解には登場人物、場合によっては語り手の「心情」を考慮に入れる必要があるのではないだろうか。具体的に池田晶(2018) から Ruth1:8b をみてみよう。

Ruth 1:8b～

【ヘブライ語原文】

לֵכְנָה שֹׁבְנָה אִשָּׁה לְבֵית אִמָּהּ יַעַשׂ יְהוָה עִמָּכֶם

חֶסֶד כַּאֲשֶׁר עֲשִׂיתֶם עִם־הַמֵּתִים וְעִמָּדִי׃

【ローマ字翻字】

leḵnɔ ššoḇnɔ ʔiššɔ ləḇêṯ ʔimmɔh yaʕaś YHWH ʕimmɔḵem ħɛsɛḏ

ka+ʔᵃšɛr ʕᵃśîṯɛm ʕim-ħammeṯím wəʕimmɔdí

【訳】

（義母ナオミの発言）お行きなさい。そしてそれぞれあなたたちの母の家へとお戻りなさい。ヤハウェがあなたたちに慈愛を下さいますように。あなたたちがかの死者たちと私にしてくれたように。

四角で囲んだ qatal 形動詞「してくれた」は池田潤(2004)の枠組みでは、動作動詞ということでデフォルト値の「過去」ということになるが、ここでは義母のナオミが二人の義理の娘たちに、その夫たちである亡くなった二人の息子たちや自分たちに対して「してきてくれたこと」に感謝を述べていると考えることができる、ということから筆者は過去というよりも、英語で言う現在完了と解釈した。英訳聖書を参考にするときは、それが原典からの翻訳かそれとも重訳かという問題が影響してくるが、筆者の解釈にある程度説得力を与えてくれると考えた。池田晶 (2018) では、ヘブライ語研究で一般的に用いられているソフト Bible Works9.0 に収録されている翻訳を参考にした。そのとき、できるだけ新しい翻訳、アメリカ英語、イギリス英語、ということを加味して 5 種類の英訳聖書、New English Bible (NEB)、New American Bible (NAB) 、New Revised Standard Version (NRSV) 、New International Version (NIV)、New Jerusalem Bible (NJB) を用いたが、これらすべてが現在完了で解釈していた。さらに今回は、これに加えて聖書翻訳のみならず、1611 年のものとはいえ、現代英語そのものにも大きな影響を及ぼしている King James Version (KJV) をはじめ、English Standard Version 2011(ESV)、New American Standard Bible 1977 (NAS)、New American Standard Bible 1995(NAU) 、New English Translation (NET)、New International Reader's Version (NIRV)、New King James Version 1982(NKJV)、New Living Translation (NLT)、Revised Standard Version 1952(RSV)、Jewish Publication Society of America Version of the Tanakh 1985(JPS)、合計 10 種類の翻訳も参照した。その結果、NLT が動詞構文を名詞構文として翻訳している以外はすべて現在完了、つまり合計で 15 種類中 14 種類が現在完了で翻訳していた。英訳聖書でそのような翻訳をしているということは、翻訳者も読み手の一人として考えると、「読み手」がそのように受け取った、と考えることもできる。池田晶 (2018) では、英訳聖書を参考に、会話文の当該箇所の qatal 形は、過去形で解釈するよりも、登場人物の心情を加味して現在完了で解釈するほうが「より自然である」ということにふれたが、それ以上は踏み込まなかったが、心情を加味するということをより強調しても良いのではないだろうか。

3. qatal 形の現代フランス語訳

英訳聖書における動作動詞の qatal 形のデフォルトについては、地の文では過去形、会話文では過去形に加えて非過去（現在完了）、という二つであった。現代フランス語では、「過去テンス」を表す形態として、単純過去 (passé simple) と複合過去 (passé composé) の二つがある。両者の違いについては、青木三郎(1993)[3]に述べられているように、現在に至るまで様々な見解があり単純化するのが困難であるが、ごくごく大まかに言えば次のようになる。単純過去は、特殊な例を除いては話し言葉には出てこずに書きことばで用いられ、完全に過ぎ去って現在とは断絶のある過去の出来事を示す。複合過去は、書き言葉と話し言葉の両方で用いられ、英語の過去形と現在完了の二つの機能を備えており、単純過去の代用として用いられることも多い。ちなみに、先ほどの Ruth1:8b の部分の qatal 形は、Bible Works9 に収録されているもので、比較的新しいフランス語訳を 5 種類、つまり French Bible en français courant (BFC)、French Bible Jerusalem (FBJ)、French Louis Segond (LSG)、Nouvelle Edition Geneve (NEG)、French Traduction Oecuménique de la Bible (TOB)を参考とした。英訳聖書は多く収録されているが、Bible Works に収録されているフランス語訳はもともと少ないので、このような翻訳数に差が出ている。上記のフ

ランス語訳では全て「複合過去」になっていた。すでに述べたように、複合過去は英語の現在完了に相当する一方で、過去を表すこともできる。つまり、聖書ヘブライ語と同じく、一つの文法的な形態で、複数の時制解釈ができるのである。複合過去を分析することによって、qatal 形の理解に何かヒントが得られるのではないか。単純過去と複合過去の使用を聖書以外のテキストではどのようになっているのか、文脈、登場人物の心情、そして読み手がどのように受け取るか、これらを考慮に入れて分析することで、qatal のテンス理解の一助になるのではないか。ここから、現代フランス語の単純過去と複合過去の使用を手掛かりに、動詞のテンス理解に登場人物や語り手の心情を考慮に入れる必要があることを示してみたいと思う。

4. 現代フランス語の単純過去と複合過去

テキスト言語学の視点からの単純過去と複合過去の区別をめぐっては、ヴァインリヒ（1982）[4] の説明が引き合いに出される。大まかにまとめると、テキストの時制は「語りの時制」と「説明の時制」に分けられるが、それはヴァインリヒ（1982: 321）で述べられているように、バンヴェニストが発話行為の２つの面を表すものとして考えた対立概念にそのまま当てはまる。バンヴェニストが発話行為面から指摘したことは、語り手の存在を考えるうえで非常に重要である。ヴァインリヒの言う「語りの時制」はバンヴェニストの「histoire（récit historique）」であり、過去の事柄を物語るという特性を持つが、そのとき話し手はまったく介入することなく出来事自らが物語り、そこでは単純過去が用いられる。一方、「説明の時制」は「discours」に相当し、話し手と聞き手の二者を想定し、話し手が聞き手に何らかの影響を与えようとするもので、過去のことを表すときには複合過去が用いられる。まとめると以下のようになる。

【表１】

時制	過去を表す動詞形態	話し手の存在
語り	単純過去	想定せず
説明	複合過去	想定する

ただし、大久保（1990:292）[5] では、語りにおいて「複合過去と単純過去が同じ段落中、ある場合には同じ文中でさえ両方出てくる場合」があり、しかもそのような例が「意外にたくさんある」と述べられている。筆者がこの度選んだテキストにも、語りの中に単純過去のみならず、複合過去が用いられている例が見られた。しかも、筆者が選んだテキストは１人称の語りであるので、話し手の存在を想定しない、ということは適切ではない。１人称の語りについて春木（2001:11）[6] では「特に１人称の小説では、複合過去が主体になっている場合もかなりみられるが、そのようなテキストでも単純過去も現れるのが普通」と述べられている。また、同じく春木（2001:13）では次のようにも述べられている。「１人称小説というのは特に、回想という形でその点が明確に現れる。そして、回想は語り手の現在から行われるのであり、現在（＝発話時）に視点をおいて過去のことを語る複合過去が、回想の開始には最もふさわしいのである。（中略）一旦回想が始まれば、視点を過去に移すのは容易になり、単純過去で継起的な出来事が語られ始める」のである。安西（2009:42）[7] でも、単純過去と交代する複合過去の主語には１人称が多いことが述べられている。上の表は、３人称物語を分析する際、確かに当てはまる例が多いものの、単純過去と複合過去の分布と、話し手の有無、そして人称の３点を総合すると、必ずしも当てはまっているとは言い難い。

すでに述べたことであるが、単純過去と複合過去の特徴について一般的に述べられていることをここでまとめてみたい。

【表２】

単純過去	複合過去
・書き言葉で用いられる ・現在との断絶のある過去を示す ・出来事の継起性 ・客観的	・話し言葉と書き言葉の両方で用いられる ・過去と現在完了の二つの機能を持つ ・出来事の孤立性 ・語り手の主観が入る

単純過去との比較から、語りで複合過去が用いられるとどのようになるか、多くの指摘がある。たとえば大久保（1990:308）では、語りの中では「原則として複合過去は現れない。複合過去が出てくると（中略）奇妙な感じがする」という指摘されている。そして、春木（2001:16）では「単純過去で書くと（中略）客観的に書くだけになるが、複合過去を用いることで語り手＝主人公の現在からの記述になり、いわば主観的な記述になる」と言われる。このほかには、青木（1993:28）では、「よく言われているように，『単過』を『複過』に置き換えて見ると，物語の展開にまとまりがなくなり，聞くに堪えない物語になってしまう」という。これらのことを踏まえて、以下でテキストを実際に分析して検証してみることにする。

5. テキスト分析の実例：母語話者の解釈

今回は１人称の語りのテキストとして Antoine de Saint-Exupéry の *Le Petit Prince*（邦訳『星の王子さま』）の２章から３つの部分を選んだ。理由としては、地の文と会話文が含まれているということ、語りの中で同一の動詞が単純過去、複合過去の両方で用いられている、ということがある。安西（2009:45）では、テキスト中の単純過去と複合過去を置き換えると、フランス語母語話者にとって不自然に感じられる箇所があることが指摘されている。テキストにより「どのように」不自然に感じられるのかは異なると予測され

るが、今回の実例の中でも、単純過去と複合過去が置き換わるとどのように感じられるかも報告してみたいと思う。以下の３つが選択したテキストである。

【テキスト１】

(1) J'*ai* ainsi *vécu* seul, sans personne avec qui parler véritablement, jusqu'à une panne dans le désert du Sahara, il y a six ans. Quelque chose s'était cassé dans mon moteur. Et comme je n'avais avec moi ni mécanicien, ni passagers, (2) je me *préparai* à essayer de réussir, tout seul, une réparation difficile. C'était pour moi une question de vie ou de mort. J'avais à peine de l'eau à boire pour huit jours.

(3) Le premier soir je me *suis* donc *endormi* sur le sable à mille milles de toute terre habitée. J'étais bien plus isolé qu'un naufragé sur un radeau au milieu de l'océan. Alors vous imaginez ma surprise, au lever du jour, quand une drôle de petite voix m'a réveillé.

【テキスト２】

Il me répondit:

— Ça ne fait rien. Dessine-moi un mouton.

Comme je n'avais jamais dessiné un mouton je refis, pour lui, l'un des deux seuls dessins dont j'étais capable. Celui de boa fermé. Et je fus stupéfait d'entendre le petit bonhomme me répondre:

— Non! Non! Je ne veux pas d'un éléphant dans un boa. Un boa c'est très dangereux, et un éléphant c'est très encombrant. Chez moi c'est tout petit. J'ai besoin d'un mouton. Dessine-moi un mouton.

(4) Alors j'*ai dessiné*.

Il regarda attentivement, puis:

—Non! Celui-là est déjà très malade. Fais-en un autre.

(5) Je *dessinai*. Mon ami sourit gentiment, avec indulgence:

—Tu vois bien…ce n'est pas un mouton, c'est un bélier. Il a des cornes…

【テキスト３】

—C'est tout à fait comme ça que je le voulais! Crois-tu qu'il faille beaucoup d'herbe à ce mouton?

— Pourquoi?

— Parce que chez moi c'est tout petit…

— Ça suffira sûrement. (6) Je t'*ai donné* un tout petit mouton.

Il pencha la tête vers le dessin:

— Pas si petit que ça… Tien! (7) Il s'*est endormi*…

テキスト１は、単に複合過去と単純過去が物語に混在している部分である。それに対してテキスト２は「絵を描く」という動詞が地の文で２度出現しており、日本語訳は変わらないが、一方は複合過去、もう一方は単純過去と、同一の意味のものが地の文で違う形態でいる部分である。テキスト３は会話部分であり、すべて複合過去になっている。その複合過去を、ごく特殊な例を除いては会話では用いられないと言われる単純過去に置き換えたらどのような印象があるか、ということを調べる目的で選んだ。

まずはフランス語母語話者に単純過去と複合過去が混在するテキスト全体を通して読んでもらった。その後、次の質問をした。

1. 日本語に訳すと同じ過去表現になるが、単純過去と複合過去はどのように違うのか
2. フランス語の小説では単純過去が基調だと言われているが、なぜ複合過去も混じっているのか

どの言語にも言えることだと思うが、自分の母語について説明するとなると、意外と難しいものである。質問１については、一般的に言われているように、書き言葉と話ことばの違いという面から両者に明確な違いがあるという回答を予想したが、分析テキストが１人称物語ということもあり、小説でありながら話し言葉のイメージとも重なるためか、機能としては基本的に同じ過去表現、との回答だった。ただし、基本的には単純過去は文学テキストの中で複合過去の代わりに使われ、小説では、単純過去は現実からの距離（つまり現実との断絶）があって、語られたことが虚構であることを示す一方で、複合過去は話ことば・書き言葉の両方の時制で、現実への近さを表し、語られていることが現実の世界のことだと感じることができる、と追加の回答があった。つまり、二者について現在述べられていることと、ほぼ同様の内容であった。質問２については、少し考えながら、「多く場合、単純過去か複合過去のどちらかに統一すると思うが、文体の多様性の一つとみることができるのではないか、ただし、複合過去で書かれると『実際に話している』という印象がある」ということだった。

テキスト１では、下線部(1)～(3)の部分に過去を表す動詞が出現しているが、すべて異なる動詞で、以下のように単純過去と複合過去を入れ変えてみた。

(1)《複合過去》J'*ai* ainsi *vécu* seul,…
　→《単純過去》J'ainsi *vécus* seul,…

(2)《単純過去》… je me *préparai* à essayer de réussir
　→《複合過去》… je me *suis préparé* à essayer de réussir,

(3)《複合過去》 Le premier soir je me *suis* donc *endormi* sur le sable …
　→《単純過去》Le premier soir je me donc *endormis*

sur le sable…

このような入れ替えが可能だとしたら、印象が変わるか否かという質問に関して母語話者は、入れ替えることは可能で、二つの時制は同じ意味を持つが、単純過去を複合過去に変えると、出来事が虚構というよりは、より現実に近い印象になる、とのことであった。過去と現在完了の二つの機能を持つ複合過去だが、原文（1）と（3)の複合過去を見ると、現在完了としては解釈できない。つまりこの複合過去は、意味的には「過去形」なのである。したがって、「過去性」という点にのみ注目すると、印象は変わるかもしれないが、交換可能ともいえる。(2)の単純過去は単に出来事を述べているが(1)の複合過去とは出来事に対する距離感に違いは特に感じられない。

テキスト２においては、両方とも「絵を描く」という意味の動詞が使われているが、それぞれ複合過去と単純過去である。それぞれ次のように入れ替えてみた。

(4) 《複合過去》Alors j'*ai dessiné*.
→ 《単純過去》Alors je *dessinai*.
(5) 《単純過去》Je *dessinai*.
→ 《複合過去》J'*ai dessiné*

入れ替え前後で印象が変わるか否かを尋ねると、同じような意味に感じられる、との回答だった。ただし、筆者としては地の文における単純過去を複合過去に変えることについて、安西(2009:46,47)で述べられている「複合過去を用いると継起的で淡々とした語りの枠から外れて、語り手の実感が表される」という指摘と「地の文の複合過去は、語り手の心の中で認識された事態を表すことの方が多いと思われる。この点においては、複合過去は、事態を全体的に捉えて表す単純過去とは性質を異にし、事態の体験主体の直接的な感覚を反映する」という指摘を受けて、次の解釈をした。複合過去を含む文「(4) Alor j'*ai dessiné,* （私は描いた)」の直前に、王子さまは、語り手の描いた絵を「大蛇に呑み込まれた象」ということを認めている。この体験は語り手にとっては初めての体験であった。語り手は、人々がその絵を「大蛇に呑み込まれた象」ということを認めてくれずに、幼少の頃より葛藤を抱き続けていた。したがって、この複合過去は、自分の絵を認められたことによって、語り手の王子さまとの間に感じたある種の「人間的な繋がり」や、王子さまに認めてもらえたということに関して、その出来事に心理的な近さを示している、つまり語り手の主観を含んでいると解釈した。一方、ちょうどこの複合過去を含む文章の直後では、王子さまは語り手の描いた絵を拒絶しているが、このエピソードの後で、語り手は再び絵を描くことになる。そこでは「(5)Je *dessinai*.（私は描いた)」となっていて、動詞が単純過去になっている。この単純過去は、出来事を客体化し、出来事と語り手との間、または王子さまと語り手との間に距離を置くことを表現していると解釈した。この解釈について、母語話者がどのように感じるか尋ねたところ、適切な解釈であるとのコメントがあった。母語話者は、筆者の解釈に加えて、次のような解釈をしている。

> この部分の単純過去については、（語り手としての）テグジュペリが出来事を適切に分析するために、一歩引いてパノラマ的な視野で見ているためではないか。また単純過去は荘重な印象を醸し出している。それに加え、単純過去 Je *dessinai* の部分では、語り手の葛藤や苛立ちを感じ、彼が今一度考えているのではないか。しかし、それと同時に、（絵を拒絶されたことに対する）落胆に加えて、これから語り手が描く絵に対して「裁き人」である王子さまが、語り手にとって好ましくないものであったとしても「真実」を語るであろうから、どのような「裁き」を下すかについて関心を抱いているために、これからもう一度絵を描くことに興味を注いでいる、とも感じた。

この他にも様々な解釈があると思うが、これはネイティブが「どのように感じたか」についての忌憚のないコメントである。語り手の「落胆」や「興味」ということで、この単純過去に「主観的」な要素が入っているとも解釈できるが、筆者は、このコメントの中の「荘重な印象」「裁き人」「真実」という点に注目した。その３つには、出来事を客体化し、語り手自身の思いを寄せ付けない侵しがたい何かがあるということで、何らかの距離を表現するための手段、というように考えられないだろうか。ちなみに、(4)の複合過去も現在完了としては解釈することができない。

テキスト３は会話文であるが、一般的に単純過去は会話の中には出てこないと言われる。しかし、大久保（1990:309 では、きわめて稀なものではあるとはいえ、単純過去が「出てくる場合もある。（中略）現代の会話でも単純過去は出てくる」という。その例として、物語世界の「現実」について、登場人物が「事実」を客体化して、自分とは切り離したい、というものが挙げられている。筆者はテキスト３の単純過去を複合過去に変え、母語話者に提示した。

(6) 《複合過去》Je t'*ai donné* un tout petit mouton.
→ 《単純過去》Je te *donnai* un tout petit mouton.
(7) 《複合過去》Il s'*est endormi*…
→ 《単純過去》Il s'*endormit*…

すると、やはり会話なら複合過去を使うべきで、単純過去は奇妙な印象がある、とのことだった。筆者の感覚では「たった今あげた」「寝てしまった」と現在完了で解釈したいところであるが、一例として英訳版（(6)の英訳は(6')、(7)は(7')）を参照すると、以下のように過去形、現在完了、特殊な例かもしれないが現在進行形、と様々な翻訳の可能性がある。

(6') I **gave** you a little sheep. (Miquênia Litz),
I'**ve given** you a very small little sheep (R. Mathews)
(7') It **fell** asleep! (Miquênia Litz)
He'**s sleeping**… (Richard Mathews)

複合過去を単純過去に入れ替えると奇妙な印象がするのは、会話にほとんど出てこない単純過去であるから、という理由もあると思うが、単純に現在完了をはじめ、様々な解釈の可能性があるものを過去形として解釈すること自体が奇妙であるから、ということもあるかもしれない。

6. 単純過去と複合過去の入れ替えと英訳

以上で物語中の単純過去と複合過去の入れ替えを分析したが、まとめると以下のことが指摘できる。

1. 地の文の複合過去は現在完了の意味を持たない
→ (1), (3), (4)
2. 地の文において、出来事との距離感において差の感じにくい単純過去と複合過去とがある
→ (2)
3. 地の文の複合過去の過去性は出来事や登場人物の感情面との近さを表す
→ (4)
4. 地の文の単純過去は、出来事との距離を表す
→ (5)
5. 会話文の複合過去は現在完了、過去形、場合によってはそれ以外の意味を持ち得る
→ (6), (7)

複合過去に注目すると、出来事との距離が近いものとそうでないもの、会話文では過去・現在完了の両方の解釈が可能で、地の文では過去形のみ、とまとめることができる。ただし、ここで一つの疑問が浮かぶ。単純過去と複合過去の違いを、多くの説にあるように、英語で言うと前者は「過去形としての機能」と「過去形＋現在完了形両方の機能」としてみるとき、果たして、英語とフランス語とでそれぞれが完全に一致しているのであろうか。例えば、I **gave** you a little sheep. という表現にしても、完全に過ぎ去った現在と断絶のある出来事、つまりフランス語の単純過去的なものとしても捉えることができるだろう。その一方で、たとえば、小さな羊を目の前に、当事者である"I"と"you"が会話をするときに、この過去形を使った表現をしたとしても、この gave はむしろ現在完了に近いような機能を持ち得るのではないだろうか。つまり、英語の過去形は、フランス語の単純過去と英語の現在完了という二つを両端とする尺度で見るとき、現在とつながりのある現在完了に近い部分にも位置し得るのではないだろうか。

7. フランス語訳聖書の解釈

それでは、ここで先ほどヘブライ語原文を示したRuth 1:8bのフランス語訳例を挙げてみる。

(LSG) … comme vous l'avez fait envers ceux qui sont morts et envers moi!

(TOB) … comme vous avez agi envers les défunts et envers moi.

【訳】あなたたちが亡くなったあなたたちの夫と私に対してしてくれたように

ヘブライ語原文の「してくれたように」に当たる部分のフランス語訳を四角で囲み、「亡くなった夫たち」には下線を引いた。「してくれたように」という部分はqatal形だが、5種類すべてにおいて複合過去で翻訳されている。一方、「亡くなった夫たち」については、ヘブライ語原文では名詞表現になっているが、フランス語訳ではTOBの名詞表現での翻訳を除いては、すべて ceux qui sont morts「亡くなってしまった人たち」と複合過去を用いて翻訳されている。「してくれた」については、今まで見てきたように、英語でいう過去形、現在完了形の両方で見ることができる。ただし、たとえ過去形であったとしても、単純過去とは異なり、現在と断絶されているものではなく、やはり話し手（ナオミ）の心情を反映して現在完了に近い意味で用いられていると思う方が自然ではないだろうか。原文では名詞表現の「亡くなった夫たち」という部分が名詞表現ではなく複合過去で翻訳されていることについても大きな意味があるのではないだろうか。物語の中では、夫と息子を失ったナオミが、二人の義理の娘と共に故郷に帰る場面であるので、この複合過去は亡くなった過去から現在に至るまでの悲しみを表していると解釈する方が自然である。「私に対してしてくれた」という表現が、名詞表現を複合過去に翻訳するにまで至るような影響を及ぼしている可能性もあるのではないだろうか。

さて、フランス語訳を参考にしたqatal形の時制解釈だが、複合過去が用いられているという点で問題がある。複合過去は意味的には過去形と現在完了のどちらの性質も兼ね備えている。では意味的に過去形なので、複合過去のテンスを「過去」とみなしてもよいのだろうか。複合過去は、形態上、英語の現在完了と同じく「助動詞 être または avoir の『現在形』＋過去分詞」であるので、現在形とみなすべきなのか、それとも、過去形とみなすべきであるのか。それとも、現在完了とみなして、「複合『過去』」ではあるが、現在形とみなすべきなのか。このあたりの解釈については青木 (1993:6-7) で述べられているが、非常に難しい問題であるので、この部分の結論は保留にしておきたい。

8. 結論

本論は、聖書ヘブライ語のqatal形の時制解釈をめぐって、英訳聖書との比較より、会話文においては動作動詞のデフォルトは現在完了で翻訳されていることが多く、登場人物の心情も考慮に入れて、過去形というよりも現在である、ということから始めた。英語の場合は、過去形と現在完了が形としては区別されているので、テンスの決定に困難な点は多くない。フランス語訳では複合過去が用いられており、単純過去との比較から、人物の心的態度や語り手と出来事との距離感を考慮に入れつつ分析した。複合過去は英語の過去形と現在完了形の両方の機能を兼ね備えていると言われているものの、複合過去でいう「過去」も英語の過去形とは出来事との距離感や心的態度が完全に重なっているわけではない。また、テンスを決定することでさえ、困難な問題があることが明らかとなった。そもそも、今まで述べられてきたqatal形のテンスのデフォルトは何を基準に判断してこられたのか。言語ごとに動詞体系が異なっており、本論で見たように、英語とフランス語の「過去」ひとつをとっても完全に重なり合っているわけではない。英語のように、形態として現在完了形と過去形を持つ言語で翻訳される際はどちらかの形式を選択することになり、それに従って受け取る側が解釈することになる。逆にqatal形や複合過去のように、一つの形式で複数の機能を担う場合は、解釈の仕方も受け取る側が判断することになる。このことから、翻訳を通すと、言語によっては原文のニュアンスに近い場合と遠ざかる場合とがある、ということを再確認できたと思う。一つだけ提案するとすれば、英訳聖書の解釈から確認できたように、登場人物の心情を考慮に入れるということも重要である、ということである。バンヴェニストやヴァインリヒの理論では、動詞形態が注目されがちで、登場人物の心情面やテキストの受け手である読み手の姿勢を考慮に入れることが手薄になっていたのではないだろうか。

謝辞

本論文を作成するにあたり、フランス語ネイティブとしてADANHO AURELE FLEURY SENAMI 氏、DEROUBAIX FABRICE 氏に非常に有益なご助言を戴いた。ここに両氏に対し感謝の意を表する。

引用文献

[1] 池田潤：アマルナ語から見た聖書ヘブライ語の接尾活用形，言語研究，126号，69-92，2004.
[2] 池田晶：旧約聖書ルツ記１，２章の会話文におけるkatal形の用法について：TMA解釈と命令形との比較を中心に，ニダバ（NIDABA）西日本言語学会，47号，21-30，2018.
[3] 青木三郎：現代フランス語の「複合過去形」の考察（1），文藝言語研究・言語篇，23号，pp. 1-33，1993.
[4] ヴァインリヒ，H.：時制論―文学テクストの分析，紀伊國屋書店，1982.
[5] 大久保伸子：語り手の時制としての単純過去，茨城大学教養部紀要，22号，291-315，1990.
[6] 春木仁孝：テキスト構成とテンス・アスペクト，GALLIA（大阪大学フランス語フランス文学会），XL号，11-18，2001.
[7] 安西記世子：語り手の知覚と心情を表す複合過去の一考察，フランス語学研究，43号，pp.39-55，2009.

分析資料

de Saint-Exupéry, A. (1971) *Le petit prince*. New York: A Harvest Book Harcourt, Inc.

データベース

BibleWorks 9,BibleWorks,LLC, 2013.